

『よく気をつけなさい』(使徒の働き 5章 33-42節) 2023.8.13.

<はじめに> 最高法院に集まった者たちは、使徒たちの弁明を聞いて怒り狂い、殺意をたがらせません(33)。自分たちの権威と面子を踏みにじり、イエス殺害の責任を負わせたからです(28)。しかし、彼らの殺意に待ったがかかりません。律法の教師ガマリエルが議場に再考を促したのです(34)。

I ガマリエルの提案(35-39)

①二つの実例(36-37)

使徒たちを議場から出させてから、ガマリエルは議員たちに、テウダとユダがそれぞれ起こした蜂起が、首謀者も追従者も雲散霧消した顛末を思い起こさせました。

②手を引き、静観せよ(38-39)

苛立つ余り、自ら手を下そうとせず、むしろ使徒たちの動きがどのように推移するかを静観するようにと彼は勧めます。この根底には、この世の中と歴史を司り、そこに働かれる神がおられる、という歴史観があります。私たちはどう考えて生活しているでしょうか。

③二つの可能性(38-39)

もしその計画・行動が人間から出たものなら、やがて自滅するでしょう。しかし、もしそれが神から出たものなら、それを滅ぼすことはできず、むしろこちらが神に敵対する者になりかねない危険もはらんでいます。だから、よく気をつけなさい(35)、と彼は警告したのです。

II 提案を受けて(40-42)

①議員たち(39-40)

ガマリエルの提案に従い、議場に使徒たち呼び入れて、鞭で打ち、重ねてイエスの名によって語ることを禁じてから、釈放しました。彼らが鞭打ちしてから釈放したのは、自分たちは間違っていない、と自負していたからではないでしょうか。

②使徒たち(41)

使徒たちは脅しの鞭を与えられました(IIコリント 11:24、申命記 25:3)。イエスが受けた鞭はそれ以上で、死刑囚への見せしめでした。彼らは、痛み苦しみ辱められる中で喜びも感じています。主イエスをより近く感じ、慰めと希望を受け取ったからです。

③なおも宣べ伝える(42)

イエスの名で語るな、と三度禁じられ、これだけ傷めつけられたにもかかわらず、彼らはなおも語り続けます。使徒たちは、人に従うよりも神に従う、と宣言したとおりです。議員たちと使徒たち、どちらに神は目を留めて、支持加担されるでしょう。

III 自分を探る

①秘密の出所(33-39)

使徒たちを追い出での会話が、なぜ本書に記録されているのでしょうか。ガマリエルの門下生の一人、サウロ(のちの使徒パウロ)が出所の可能性大です(22:3)。本書の記者ルカは、単なるスクープ・暴露として記録したのでしょうか。

②歴史は語る

ルカが本書を書いたのは、この出来事から約30年後です。そのときイエスを信じる者たちはどうなっていたでしょう。ガマリエルの提案と照らし合わせるなら、イエスの福音は人間から出たものなのでしょうか、それとも神から出たものなのでしょうか。なぜそう言えるのですか。

③今も聖書は語る

ガマリエルの提案は大変穏健で賢明です。それは箴言 16:1-3、3:5-7 を思い起こさせます。私たちは、自分を優先して神様さえ押しつけてしまっていないでしょうか。一歩引いて神様に信頼し、自分の大切なものを御手に委ねるとき、神様はそれを確立されます。

<おわりに> 神を味方につけ、神側に着くことが最善であるということは、誰でも直感できます。ならば、その神に自分の計画・行動・願望を話し、相談し、その指導に従うことに具体的に進むべきです。それを阻むのが、神よりも自分が正しいとすることです。その誤解と過ちから救うためにイエスは来られ、呼び掛け、手を差し伸べておられます。(H.M.)